

マールブルク遊学記

樋浦 明夫



今年4月末から9月末までの5ヶ月間、マールブルク大学（ドイツ）解剖学・細胞生物学研究所の分子神経科学教室（ワイエ教授、Prof. Dr. med. Weihe）に留学しておりますので、こちらの見聞をご紹介します。

マールブルクはヘッセン州（州都はヴィースバーデン）の小都市で、人口7万人余りの約3割が学生という、ドイツでも有数の大学町です。私の所属する研究所の三階から、この街のシンボルのエリザベート教会と方伯城（Schloss）が見えます（写真1）。マールブルク大学は1527年に当時の領主フィリップ（Philipp）によって、ドイツ最初のプロテスタントの大学として設立され、Philipps-Universität Marburgと呼ばれます。現在 学生数 18,000 人、留学生 約 2,000 人で、ドイツでは中規模の大学です。

これまでに様々な分野の世界的に著名な人達がこの大学で教えたり、学んでいます。グリム兄弟のヤコブとウィルヘルムが1802-06年にここで学んだことは良く知られてい

写真1. 研究所の三階から見えるエリザベート教会の尖塔とシュロース（左手後方、現在は大学の博物館になっている）。向かいの建物はロベルト・コッホ通りに面する研究棟とコの子でつながっている実習棟（二階）で、朝8時前にはもう骨学の実習が始まっていた。

ます。学生の頃に見た、ロシア革命に翻弄される一医師の人生を描いた映画「ドクトルジバゴ」の作者でノーベル文学賞（1958）のバステイルナークが、若き日にここで勉強していることを、こちらに来て知りました。最初のノーベル医学生理学賞（1901）の受賞者フォン・ベーリング（Emil von Behring）の研究所はマールブルク大学の衛生学教室（Hygiene-Institut）でした。彼はBehringwerkeを設立し（1895）、それが現在は医薬品の製造など14もの工場を併せ持つ一大企業に発展しています。

この大学最古の建物は Alte Universität と呼ばれて14世紀の初めに修道院として建てられたもので（写真2）、今でも使われています。大学には Japan-Zentrum（日本研究センター）といって日本のことを研究する機関があり、その125周年記念が6月にこの建物の大講堂でありました。センターのメンクハウス教授（Prof. Menkhau）に招待され参加してみました。外見は古色蒼然とした建物ですが、中に入ってみると実に荘重な感じがします。講堂の3面には壁画があり、その一つフィリップが仲介してルターとツヴィングリをシュロスでの宗教会議（1529）に招待する絵はなかなか迫力があります。記念講演の途中と最後にロビーと中庭で簡単な立食パーティがあり、それを準備できる厨房があるのには感心しました。一度セミナーに参加するために入ってみた生理学研究所（写真3）も表口に入る



写真2. ラーン川の対岸から見たアルテ ウニヴェルジテート。ここから Schloss までの石畳の坂道は中世そのものという感じで、安らぎをおぼえるところ。



写真3. ドイツハウス通りをはさんで、教会の対側にある生理学研究所。左隣には皮膚科の病院がある。平日は入り口に学生がたむろしているが、週末はこうに教会見物の観光バスが止まっている。教会と小児科病院の間（駐車場）に、パンや花などを売る朝市が開かれる。

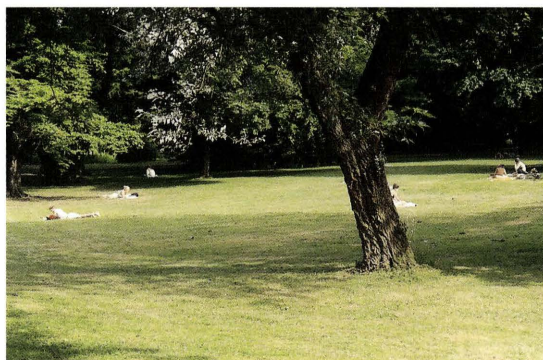


写真4. 旧植物園の中 ここも大学の所属であるが、陽が射すと日光浴をする人たちが現れ、日本ではちょっとお目にできない光景となる。

と階段があり、それが実に立派な造りになっています。この建物の右手奥にベーリングの彫像がひっそりとあります。その隣に一面蔭にからまれた細菌学研究所があり、さらに隣接して産婦人科病院があって大学の敷地になっている Alter Botanischer Garten (旧植物園、写真4) に続いています。

解剖学研究所のすぐ隣には病理学研究所 (現在は Institut für Klinische Zytobiologie und Zytopathologie des Fachbereichs Medizin と表示されている) があります。そこに入ると垂れ幕 (写真5) があり、三階が解剖学博物館になっています。二階のフロアには田原 淳, Aschoff, Disse の展示ケースがあり、アショッフと田原やディッセと日本の解剖学との関係などを知ることが出来ます。

そんな折に、こちらにいることを藤田先生にお知らせしたら、須磨、島田 (宗)、島田 (達) 編著の『田原 淳の生涯』が送本されてきました。それは 100 年前の田原による田原結節の発見を記念してこの 5 月にミクロスコピア出版会から出版されたものでした。大きな興味で読み終え、藤田先生に こちらのアウミュラー教授 (Prof. Aumüller) とワイエ教授に 献本したい旨を伝えたとこ、粋な計らいによって 2 冊送っていただき、日本とマールブルク大学の研



写真5. 旧病理学研究所 田原 淳は 1903 ~ 06 年、ここで心臓刺激伝導系を発見した。本誌 18 巻 2 号、36 頁で紹介された吉野画伯によるアショッフ・田原ら研究者の群像の絵は、この垂れ幕の左上方の壁に掲げられている。

究者の仲介を出来たことは、身に余る光栄でした。

このように マールブルク大学 (医学部) は、エリザベト協会の周囲にある古い、独立した いくつかの研究所と病院から成っています。ラン川川の対岸の丘陵地 (ランベルグ) には 1980 年代に建設された外科、内科などの近代的な病院、理学部やマックス・プランク研究所などがあります。そこにも大学付属の Neuer Botanischer Garten (新植物園、整備中) があり、世界中の草花が植えられています。奥の深さと余裕が、私の感じたドイツの大学の印象です。

ひうら あきお 徳島大学歯学部 口腔解剖学第二教室 助教授



世界の心臓学を拓いた 田原 淳の生涯

た わ ら す なお

須磨幸蔵・島田宗洋・島田達生編著

100年前、1903年ドイツの名門マールブルク大学で猛烈に勉強した一人の日本人がいた。大分県出身の田原 淳である。師し、アショッフのもと、単独で心臓の刺激伝導系の発見という前人未到、世界をリードする偉業をなし遂げたのである。本書は、遺された書簡などから発見の過程とその生涯を伝えるものである。

発見100年
記念出版

■ B 5 変形判上製本
280頁 4,600円+税

■ 発行 ミクロスコピア 出版会 ■ 発売 考古堂書店

☎ 025-229-4058
☎ 0088-25-5800 (無料)